

古代エジプトのザウイエット・スルタン採石場の グラフィティをめぐる文化変容について

大川平 亜希子

西洋史学専門 前期課程 2年

はじめに

この報告書の構成について、まず渡航前の準備、調査の目的とその意義を明らかにし、次に調査フィールドや扱う史料の性質・調査方法を示した上で、調査結果によって明らかとなったこと、最終的に修士論文での今回の調査結果の位置づけと今後の展望を報告していく。また今後フィールド調査に参加希望する学生に対して、有益な情報を紹介することも目的としている。

調査期間

2007年 8月10日～24日

調査地

エジプト、エル・ミニヤ付近のアコリス遺跡およびザウイエット・スルタン採石場

渡航前の準備

事前準備として、まず採石場のグラフィティを読む上で、言語の習得が重要となる。全てのグラフィティは、ギリシア語・デモティック（当時エジプトの民用文字）のどちらかで記述され、特に頻出する月名・人名・数字を中心に理解しておくことよい。また採石場に残された文字の形や印は独特のため、事前にグラフィティの拡大写真を見て読み方に慣れておくことも必要である。またこれまでの報告書を読み従来の調査で明らかにされた点を把握し、自分の参加する調査期間中にどんな史料データが得られるのかを具体的に事前準備が重要となる。今回の場合、自分が修士論文で扱いたい史料データが何であるのか当初漠然としていたことは反省すべき点である。そのため、事前に参加する指導教官と相談した上で、調査で得られるデータと自分の研究テーマとをすり合わせる作業が重要とな

る。これにより、その後の論文作成の上で調査結果の位置づけが明確となり、史料をより効果的に扱うことが可能となる。

調査の目的と意義

今回私がアコリス遺跡調査に参加した目的は、ザウイエット・スルタン採石場のグラフィティにおける人物名データを調査することで、当時の採石場で活動した支配者層ギリシア人と在地エジプト人との文化変容を明らかにすることである。またその意義について、私が修士論文で扱うパピルス史料（税に関する行政文書）と採石場のグラフィティの時代が一致する可能性が高く、両者を比較することで当時の文化変容の地域差を明らかにできる点が挙げられる。さらに現存する古代史料では珍しく、採石場グラフィティは今まで研究史料として扱われたことのない貴重な一次史料であり、このような価値ある史料を今回調査で扱うことができたのは、古代史を研究する者として非常に貴重な経験であった。

調査フィールドについて

アコリス遺跡は、カイロを南へ約230km いった中エジプトに位置している。さらにアコリス遺跡から南東約12km 進むと、西端にナイル河流域が沿う殺風景な高台に南北に伸びている古代の石切り場、ザウイエット・スルタン採石場がある。

1981年以降の考古学調査により、ヘレニズム時代のアコリスの主要産業の一つが石材採掘であることがわかっている。当時の採石場では石灰岩を採掘し、仕上げ加工された巨大な石材を周辺の村の船着場へ運びナイル河で輸送していることは明らかである。当時エジプトを支配していたギリシア人（マケドニア人）王朝のプトレマイオス朝によって新首都アレクサンドリアの都市建設や在地の神殿の建築活動が活発となり、その結果石材需要が増しザウイエット・スルタン採石



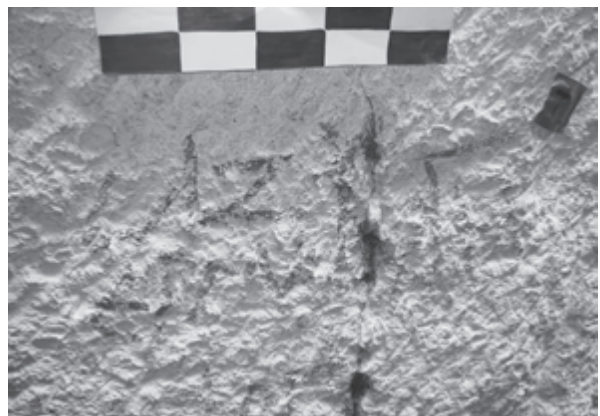
アコリス遺跡



ザウイエット・スルタン採石場



アコリス遺跡 巨大なギリシア語碑文



採石場のグラフィティ

場でも盛んに石材の採掘・加工・運搬が実施されていた。このことは、現在でも採石場の壁面に多数現存するギリシア語とデモティックで書かれたグラフィティからも推測することができる。

ザウイエット・スルタン採石場の年代に関しては、これまでの調査により前3世紀中頃プトレマイオス2世の統治下で操業されていた可能性が高いとされている。この年代設定を受け入れるならば、同時代のパピルス史料より当時の採石場は王朝の独占事業下で運営・管理されており、ザウイエット・スルタン採石場もこうした状況に置かれていたと推測される。今回の調査や修士論文では、上記の推測の下グラフィティを考察している。

調査の方法

ザウイエット・スルタン採石場での調査方法は主に2つあり、一方が実測を伴う採石場全体の構造やその技術方法を明らかにする建築学的アプローチともう一方が採石場に多数残るグラフィティから当時の正確な

暦年代の設定や採石活動の実態を探る歴史学的アプローチである。今回私が所属したのは後者であり、指導教官でもある周藤芳幸教授の指揮の下採石場のグラフィティ調査に参加した。

具体的な調査としては、主にこれまで発見されているグラフィティの位置・内容の確認と、新たなグラフィティ探しである。2006年時点の調査で発見されたグラフィティの数は、谷間にある判読可能なギリシア語・デモティックとするとおよそ172点記録されている。多くのグラフィティは、谷間に均等に分布しておらず複数の地点に集中しており、調査記録ではグラフィティの集中する各セクションにアルファベットを付している。具体的な調査の手順は以下の通りである。

その1. グラフィティの集中する各セクションにアルファベットを付す。

その2. 東西南北いずれかの最端にあるグラフィティからスタートし、一方通行の順番で各グラフィティに番号をつける。(例：南からA1, A2, A3…)

その3. 2と同時進行で、グラフィティの位置・内

容を確認・記録し、スケールを付近に貼りつけグラフィティ一つにつき1枚の写真撮影。

これらのサイクルで各セクションを巡回していく。但し、日が昇るにつれ採石場全体に日が射しこみ光の加減でグラフィティが全く見えなくなるため、調査時間は午前六時頃に開始しお昼には完全に調査が出来なくなるため、限られた時間内に手早く上記の手順をこなす必要がある。

グラフィティの特徴

基本的にグラフィティは特徴的な朱色で書かれ、筆記具はギリシア語の場合は細い毛筆で、対照的にデモティックは比較的幅のある毛筆が使用されている。

書き方について、三つの表記形式に分類できる。タイプ①は、夫々特徴をもつギリシア語かデモティックどちらか一つの言語で書かれており、このタイプは谷間のあちらこちらで目にすることができる。タイプ②は、1つのグラフィティに混合された形式で書き残されるものである。例えばL45では、日付といくつかの数字だけがギリシア語で記されているが、残りのテキストはデモティックで記されている。最も興味深い表記形式が、タイプ③の二言語併記である。これはギリシア語とデモティック二つのグラフィティがほぼ同一の内容で併記されている。タイプ③のグラフィティはL地区で最もよく現存しており、おそらく二つの言語を用いて1つのメッセージを伝える必要性があったと推測されている。また典型的なギリシア語グラフィティの特徴は、三つのパートで構成されている。まず年代は王の治世年・月名・日にちで記され、人物名は主格か属格形で表記、時折複数の数字が記される。この数字については何を示すものなのか現在のところわかっていない。

調査により明らかとなったこと

今回修士論文では、主にグラフィティに書かれた人物名に着目している。そのデータ数はこれまで発見されたグラフィティで、かつ比較的判読可能な40例を扱っている。プトレマイオス朝時代の史料から発見される人物名の研究により、ギリシア人・エジプト人夫々の名付けの特徴が明らかとなっており、従って名前から個人の民族性を指摘することがある程度可能である。そのため修士論文では、各グラフィティの人物名におけるギリシア・エジプト・その他の名付けの特

徴を挙げ、当時の採石場で何らかの形で活動していたギリシア人・エジプト人との文化変容について考察している。この報告書では、その一部を報告する。

〈セクションL・J〉

年代：前3世紀中頃（治世34-36年）

特徴：しばしば二言語併記で垂直面に表記。人名は断片的なものも含めて11例、ギリシア語・デモティックの両方の名前が存在し、主にギリシア語の人物名は属格形で表記されている。

このセクションでは、日付の間隔が僅か数日であるが、ギリシア人・エジプト人両者の名前が記述されており、このことから両者が共に活動していた可能性が高いと推測できる。

〈セクションF〉

年代：前3世紀中頃（治世37-38年）

特徴：人物名は7例が発見。全ての人がエジプト人名を名乗り〈L+E〉マークを名前の直前に伴っている。

〈セクションQ〉

年代：断定できず（治世25・2年）

特徴：判読できるグラフィティの全てがギリシア語で、他セクションに遍在するデモティックがここには全く存在せず。人物名は、現存する9例が全てギリシア人名で記されている。一例に典型的なキュレネ人の名前が記述。

この2つのセクションは、セクションJ・Lとは異なり、ギリシア人・エジプト人がそれぞれ別に活動していることがわかる。またセクションFの〈L+E〉マークについてよく分かっていないが、これまでの調査研究より、当時特権身分であった石切り工(eleutherolatomoi)を示しているのではないかと指摘されている。

最後に、キュレネ人とユダヤ人の人物名が1名ずつ発見されている。当時のエジプト在地社会で代表的な入植者であった両者が、中エジプトの採石場にまでも広く分布していることがわかる。またL13のユダヤ人シモンの存在について、当時ユダヤ人はギリシア人身分として優遇されており、他のパピルス史料からも上エジプトで収税吏・政府役人として活躍するユダヤ人も存在するため、L13のシモンが役人として採石活動の管理に関与した可能性も主張できるかもしれない。

まとめ・今後の展望

ザウイエット・スルタン遺跡において、採石場に残された人物の名前から、前3世紀頃にギリシア人と在地エジプト人の両者が共に活動している様子を指摘することができる。当時の採石場はプトレマイオス王朝の独占事業として管理されているため、支配者層のギリシア人が監督役人として通訳・書記官の在地エジプト人を従え活動していたと推測できる。しかしながら、採石場でのギリシア人・エジプト人の接触による文化変容（二言語併記など）はあくまで特殊な状況下の行政レベルであり、当時圧倒的多数の人々が居住した在地エジプト社会における両者の関係・文化変容の浸透を同じように主張することは出来ない。だがプトレマイオス王朝が統治を始めてまだ数十年頃の当時、既にエジプト地方に存在する採石場では両者が接触している様子を伺いすることがグラフィティ・人物名の調査より明らかである。

今回の修士論文ではグラフィティに記された人物名に限定した考察となった。今後さらなる調査で、人物名は勿論グラフィティの総合的なデータ（年代、言語、位置関係など）を分析・考察することで、採石場全体のグラフィティの傾向が明らかとなり、当時このグラフィティがどのような役割で記録されたのかを指摘されることが期待される。

また採石場とほぼ同時代の前3世紀に作成された膨大なパピルス行政文書の研究から、当時プトレマイオス二世による大規模な経済統制が実施されていることがわかっている。これらの研究より明らかにされた、当時の行政組織や経済活動の管理体制を1つの手がかりとして、ザウイエット・スルタン採石場のグラフィティとの接点を指摘することができれば、さらに前3世紀におけるプトレマイオス王朝の行政組織やその特性について新たな視野を見出すことが出来るかもしれない。